



■ 瀧脇綾乃 (ふちわき あやの)
2012年 人間科学部 心理・行動科学科卒業。在学中に精神保健福祉士養成課程を経て国家資格を取得。医療法人貴生会 和泉中央病院を経て、2014年8月より神戸大学医学部附属病院の精神科に入職。精神障害者のケースワークを担当。



「救えるなんておこがましいことは
思っていません。でも、関わることで
患者様の人生にプラスとなる『何か』を
一緒に探すことはできるはずですよ。」

●涙も共感を伝える術

「実は、音楽大学を受験するつもり
だったんです」。3歳から高校3年生の
夏まで、音楽の道を歩んできた瀧脇さ
ん。留学も決まっていたが体調を崩して
進路変更を余儀なくされ、音楽療法士に
興味を持った。当時の担任から「仕事の
幅が広がるから、カウンセラーを目指
しては？」とアドバイスを受けて勉強

様々な精神障害を抱える患者へのケー
スワークを受け持っている。業務内容
は患者の生活全般に及び、ライフス
テージによって必要となる支援も変わ
るため、終りはない。面談では、患者
が困っていることを聞き出し一緒に解
決していく。話してくれる内容とは別
のところ、要因があることも多く、医
師をはじめとする院内スタッフ達と密
に連絡をとりながら、病気の全体像や
人物像、ライフスタイル等を総合的に
みていく。また、患者の居住地域との
連携を図り、必要な就労支援施設や地

域活動支援センター、訪問看護師等を
手配し、介護保険サービスや福祉サー
ビスなどの情報案内も行う。患者の家
族や知人と連絡をとるだけでなく、患
者の家に行き、生活環境を目で確かめ
ることも多い。「親も主治医もキャッチ
していない情報を、いきつけの喫茶店
のオーナーが気づいて連絡をくれ、病
状の変化に対応できたこともありませ
う。あらゆる方面から患者様の情報を
キャッチし、チームで共有して次の一
手を考えていく。これが大きな分岐点に
繋がることもあるんです」。



一人ひとりの患者が より生きやすくなるために

●精神保健福祉士
瀧脇 綾乃 さん—— FUCHIWAKI Ayano

統合失調症、うつ病、認知症、摂食障害や不安障害…。
複雑化した現代社会において、誰もが罹りうる心の病。精神
保健福祉士 (PSW) とは、そうした精神障害を抱える
人に対し、社会復帰への相談援助を行うソーシャルワ
ーカーのこと。PSWとして神戸大学医学部附属病院の精
神科に入職し、患者と家族、医療チーム、地域の施設や
医療機関などの連携を図るため、日々奮闘している瀧脇
綾乃さんに話を聞いた。



勤務する神戸大学医学部附属病院精神科のスタッフたちと

していく内に、人を取り巻く環境にア
プローチしていくPSWの専門性に面白
みを感じ、進む道を決めたという。
神戸女学院大学に在学中、瀧脇さん
は実習で大きな悩みを抱えた。もとも
と涙もろい性格がゆえ、患者から辛い
体験や頑張った話を聞くと、どうして
も泣いてしまうのだ。対人援助の心得
とされる「バイステイックの7原則」
の中にある「統制された情緒的関与」

「患者様の前では感情をコントロー
ルしなければならぬ」と意気込みす
ぎた結果、自分らしさが分からなくな
っていった。「泣き虫PSWが居たつて
いいんじゃない？ 喜怒哀楽が分かりや
すくて」。相談した水本誠一先生からの
言葉で、一気に肩の力が抜けた。後に、
患者からも「瀧脇さんに泣いてもらっ
たから私も泣けた」、「一緒に泣いても
らってスツとした。私だけが辛いと思

●患者様の応援団をつくる

現在、瀧脇さんはPSWとして、

入職当初は、何でも知っていなくて
はと焦りがあった。しかし、この仕事
は患者を中心に主治医や看護師、作業
療法士達とチームで進めていくもの。
「どう対応したらよいか分からない時
も、誰かが何かしら答えを持っていた
り、導き出したりしてくれる。先輩や
患者様から様々なことを教わり、今で
は知らなくて当たり前、勉強していけ
ばいいと思えるようになりました」。

●PSWとしてのあり方を模索

瀧脇さんが心掛けていることの一つ
に「これをしていただいた方がいいなと
思ったら、すぐ実行」というのがある。
精神障害は快復までのスパンが長い。
数カ月、数年後に「あの時、〇〇を手
配してくれたから死ななくて済んだ」と
言われることが何度もあり、その度
にやっておいてよかったと胸をなで下
ろすのだという。

また、「決めつけない」ことも意識し
ている。経験値は大切だが、前にも似た
タイプの患者がいたとパターン化して
しまふと、重要なサインを見逃してしま
う。「同じ病気でも違う症状が出るこ
もあり、病気の影響で思考がまとまらな
かったり、自己表現し難かったりする方
もいます。新規の患者様と接する際は、
個性性を見るよう気を引き締めないと」。

●その人の持つ力を育て応援する

「自分のことを奈落に突き落としたの
は人間だけど、そこから救ってくれた

のも人間だった」。学生時代、アルバイ
ト先の就労支援事業所で出会った利用
者が発したこの言葉を、瀧脇さんは
ずっと大切にしている。「人を立ち直ら
せるのは、その人自身の中にあるもの。
PSWがいなくても人は生きていける
し、救えるなんておこがましいことは
思っていない。でも、関わることで
患者様の人生にプラスとなる『何か』を
一緒に探すことはできるはずですよ」。幻
聴や幻覚に苦しみ、死を口にする患者
もいる。たとえその人が本当に人生を
終わらせたいのだとしても、自分を必
要としてくれる居場所、役に立てるこ
とがあると知れば、変わる結果もある
と瀧脇さんは言う。また、混沌とした
精神病の世界から抜け出すことができ
れば、やはり生きたいと思うかもしれ
ないとも。「PSWの業務内容は多
岐に渡りますが、社会での居場所や役
割を見つめるお手伝いをし、より生き
やすくなるよう働きかける。ことを目
指している点は、全てにおいて共通し
ています。私の役目は、患者様の中に
埋まっている種に水をやり続け、芽が
出ろくと声をかけたり、時々休ませた
りしながら育ちを見守ること。それによ
って少しでも楽になつてもらえれば。
何年後、何十年後かもしれないけれど、
その芽が育つて花が咲いたら、私のこ
とは忘れていても全然構わないんで
す」。患者自身が生きる意味と居場所を
見出し、生きてくれる。それこそが、
瀧脇さんのやりがい繋がる。